

米欧亜回覧

第52号
発行

特定非営利活動法人

米欧亜回覧の会

編集

広報メディア委員会

十月の全体例会は十八日、 西岡秀三氏を招いて環境問題を聞く

十月の全体例会は、十八日(土)十三時三十分から日本プレスセンター(内幸町)で行なわれる。一部の会務報告に続き、二部は現未来部会が担当する講演を予定している。講師は、西岡秀三氏(国立環境研究所参与、工学博士)、テーマは「地球温暖化への挑戦―政府、企業、市民は何をすべきか」。また、三部として懇親会も計画中である。



7月全体例会(日本プレスセンター)

を専門とし、二〇〇四年から〇八年にかけて、環境省地球環境研究「二〇五〇年温室効果ガス削減シナリオ研究」のリーダーを務められた。ノーベル平和賞受賞で話題のIPCC(気候変動に関する政府間パネル)において、第四次評価報告第二作業部会報告書の執筆もされた西岡氏から、地球温暖化の現状、世界全体で本件にいかに取り組むべきか、特に、日本の政府、企業、市民は何をすべきか、分かりやすい形でお話いただき、皆で議論することとしたい。

七月全体例会は、 泉三郎氏の出版記念講演

七月の全体例会は、十二日(土)の午後、日本プレスセンターの九階大会議室でおこなわれた。

一部では会務報告がなされ、事務局問題、各部会報告などがなされ、先に亡くなられた水澤

周氏の冥福を祈って黙祷をおこなった。二部では泉三郎氏による「誇り高き日本人」(PHP研究所)出版記念講演があり、質疑応答も活発に行われ、有意義だった。

また、三部は「新橋亭」で懇親会がおこなわれ、酒食の間に盛り上がった。

(詳細は二頁)

広報メディア委員会設立 ホームページ、メールによる案内が始まる

インターネット部会、広報部会などの名称で試行錯誤を続けてきたが、このたび広報メディア委員会として設立され、六月三日に第一回の会合が開かれた。担当幹事はニュース編集担当の中山氏と広報の経験豊富な藤田氏。

広範な層に「実記」、使節団、当会を伝える契機となる待望の書籍の刊行、新規会員予備軍が多く参加するDVDを見る・聞く・語る会やグローバルジャパン研究会などの動向に呼応して、広報・PR活動を整備し、当会の運営および活動活性化を図ることが目的である。

当会に相応しい広報の基本姿勢の議論、情報交換と同時に、既存のメール連絡網やホームページによる案内など、当会のネットメディア活用 of 具体化も進展させている。

(詳細は三頁)

「何処へ行った日本?」、
「パッシングからミッシングへ?」

日本経済新聞の「中外批評」で小池洋次氏がこんなことを書いています。

「ミッシング」という表現は、英紙フィナンシャルタイムズのコラムニスト、フィリップ・ステファン氏が、洞爺湖サミットの直前に使ったのが最初である。ポイントが、主に政治面で日本が何を考え何をやるか分からないということにある。

世界に発信すべき「日本の思想」とは?

泉 三郎

て研究しようという試みである。八月の研究会ではトヨタ自動車の石坂芳男氏(元副社長・海外部門統括)から「世界百七十七ヶ国にトヨタウェイをどう発信したか」を聞いた。そのシビアな体験からじみ出る話は極めて興味深く有益で、そこには日本的な思想や知恵が、英語によるプレゼンテーションの形でいかに実践されてきたかをうかがい知ることができた。

小池氏がその必要を強調する「英語による主張と説得」は、経済大国日本を支えるビジネスマンやエンジニアの最前線では、おそらくトヨタの場合のように日々黙々と行われているに違いない。

「このところ毎月開催している、わが「グローバルジャパン研究会」は、まさにそうした事態に対応すべく、世界に向けて日本が主張できる中身、コアになる思想ないしビジョンについて

問題は、それが日本では政治面や言論面でも弱体だということではなからうか。日本は東洋と西洋の知恵を併せ持つユニークで貴重な存在なのだ。そのコアにある思想を明確に認識し、理論武装して、自信を取り戻すことが喫緊に必要なことではないか。

第48回 全体例会

泉三郎氏の出版記念講演 「誇り高き日本人―国の命運を背負った 岩倉使節団の物語」について



講演する泉三郎氏

七月例会は内幸町、日本プレスセンター会議室において行われた。出席者は四十二名。講演に先立ち行われた各部会報告では、総務部会・山田(事務局移転に伴う事務処理の現状、二〇〇六年の国際シンポジウム報告書の書籍化についてなど)、実記を読む会・桑名、英文実記を読む会・小林、現未来部会・西井、歴史部会・小野、広報メディア委員会・中山、その他の活動を総括して泉(DVDを見る会、グローバルジャパン、書籍の出版状況など)以上七名より現況と今後の活動についてそれぞれ簡潔な報告があった。報告の最後に、去る六月七日に逝去された水澤周会員(享年七十八歳)のご

冥福をお祈りして、出席者全員で黙祷をささげた。

なお、講演終了後、新橋亭別館において懇親会が開催され、二十一名の会員が出席し賑やかな歓談の機会をもつことが出来た。

(文責) 山田哲司

□講演のあらまし

「誇り高き日本人」は、題名からしても表紙のデザインからしてもちよつと既刊の本(「堂々たる日本人」と似ていて紛らわしい。でも副題をみていただければわかるとおり、「堂々たる日本人」の方は「岩倉使節団」の概説本であるのに対し、「誇り高き日本人」の方は、「岩倉使節団の群像物語」で、これはヒューマンストーリーです。

岩倉使節団に関する私の最初の本は、一九八四年に日本経済新聞社から出した「明治四年のアンバサドル」でした。この本はノンフィクションストーリーとして書いたもので、出版社も肩入れしてくれて初版八千部を刷った。そして書評でもあちこち取り上げてくれて評判もよかったのですが、残念ながら売れ行きが

のびず増刷されることはありませんでした。ただ、私としては、内容的に誤りもあり書き足りないことも多く、特に旅の後半を走ってしまい、旅の成果についてもちゃんと書くことができず、すごく思いが残った本でした。ですからいつかどうしても大幅に書き直しちゃんとした本にしたいと思いつけていたのです。

しかし、岩倉使節団の全容を捉え、その群像を描こうとすれば、どうしても大部な書物になる。そして調べるのも、書くのも大変だし、出版社もリスクがあるからなかなか乗ってくれないという事情がありました。

そこで、私は別の角度から「堂々たる日本人」とか「岩倉使節団」という冒険とかいう解説本や、「米欧回覧百二十年の旅」(上下二冊)や「新米欧回覧の記」というエッセイ本を書いてきました。

しかし、いつかは「明治四年のアンバサドル」の本画、デッサンではない本格的なものを書きたいと思っていた訳で、まあ三年位から少しずつ準備をすすめてきたというわけですね。それが今回の現代語訳のコンパクト版出版がきっかけになって、チャンスがめぐってきたということですね。ですから、今回の「誇り高き日本人―岩倉使節団の物語」

は、いわばこれまでの集大成というべきものであり、既刊本とは異なり、本格的な歴史物語として読んで欲しい、その意味でこの本を是非通読してほしいと願っています。

さて、この本の狙いについて若干ふれますと、第一には、この遣唐使にも比すべき歴史的な大壮挙を、歴史書としてではなく人間的な物語りとして描くことでした。でも、ご承知のように使節団は四十八名から構成されてお

り、留学生を含めた随行員も含めると百名を超えます。それに後発隊やら、現地で会った留学生、さらには留守政府の要人も描くとすると、登場人物はさらに広がる。ですから書き出すととめどなく大部な書物になってしまうのです。そこで、この本では、五人に焦点を絞りました。大使副使の岩倉具視、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文の四人、それと「米欧回覧実記」

の著者、久米邦武です。それから二つ目には、久米の「米欧回覧実記」を縦糸に旅の行程を追いながら、そのさわりの部分や興味ある評論部分を適宜引用したことです。とくに久米が総括をして

いる各国のまとめの部分や第五巻にあるヨーロッパ総論、「政治社会論」とか「工業、商業論」とかありますが、あ



求めに応じて著書にサインする 泉三郎氏

れをどこに入れ込むか、ちよつと苦心しました。そこで大西洋とか地中海とかインド洋とか、のんびり時間のあがる船旅のところでそれを挿入しています。

そして三つ目には、最後のところ、岩倉使節団は何であったのか、その「土産」はなんだったのか、明治日本に及ぼした影響について触れています。私なりの解釈ですが、それを簡単に書き添えました。

それからエンディングをどうしようかと思つたのですが、五人の人物が帰国後どのような仕事をし、生きたかを少し書き加えました。明治十年には大久保が暗殺され、明治十一年には西南戦争の最中、木戸が病死する。それから、岩倉が明治十六年、伊藤は明治四十二年に亡くなり、な

んと九十三才まで生きています。それぞれの人物の最期まで、時代背景も含めフオロウして終わっています。

さて、今日の主題ですが、終章の「岩倉使節団は明治日本に何をもたらしたか」について、配布資料に基づきお話をしたいと思えます。ただ、紙幅の都合もあり、本紙ではこの部分を割愛します。本書の三十三章を参照ください。

(文責) 泉三郎
(写真) 橋本吉信

訃報 水澤周氏

「米欧回覧実記」全五巻の現代語訳を完成され、当会の理事で、永らく「実記を読む会」のチューター役を務めた水澤周氏が、六月七日肺炎のために逝去されました。享年七十八歳。

故人の遺志で葬儀は行わず、近親者のみで密葬が行われました。三十日以上経った段階で関係者に死亡通知をだすようにとの遺言



当会活性化に向けて 広報メディア委員会始動

本会の諸活動を一層活性化すべくその一環として、四月の幹事会で「広報メディア委員会」を正式に設立することになった。担当幹事は、中山進氏と新任の藤田貴氏。委員会設立の背景は、「現代語訳・米欧回覧実記」普及版および泉代表の集大成的著作「誇り高き日本人・岩倉使

があり、当会のメンバーも遅れて知った次第です。

水澤さんは、五年前から「米欧回覧実記」の現代語訳に挑戦、六百三十五日をかけて全五巻の訳業を完成されました。その枚数は四百字詰め原稿で四千枚にも及び、さらに八百項目に及び注記も付けられました。それは三年前、慶應義塾大学出版会から刊行され、研究者や読書家に多大の裨益を与えました。しかし、その訳業の過労が重なってか、二年前に脳こそくで倒れ、以来闘病生活を送ってこられたのです。

そしてこの六月、待望の「現代語訳」コンパクト(廉価)版が出版の運びになり、分冊の販売も可能で

節団物語」が刊行され、従来のDVDに加えて、幅広くPRする有力な素材が充実したことがある。また、新たにスタートしたDVDの会やグローバルジャパン研究会には、既に学生や会員外の方々が多く参加しているが、関心を持った人が当会の内容や入会方法を知ることができずチラシがない。さらに、部会に所属していない新規会員が催しを知る手段が少ないなど、基本的な広報体制を一貫して

格段に多くの読者を獲得することになる。逝去は奇しくもその出版と同じ月でした。

水澤さんは、早稲田大学文学部卒、NHKの記者、日本読書新聞などを経て、フリーの編集者兼ライターとなり、幾多の書物の出版にかかわってききました。主な著書に「青木周蔵―日本をプロシヤにしたかった男」(中公文庫)、「連句で遊ぼう」(新曜社)などがあります。

なお、有志による「偲ぶ会」が左記により催されます。出席される方は事務局まで連絡をお願いします。

日時 九月十九日(金)
十八時～二十時半
場所 国際文化会館
会費 五千円

整備する必要に迫られている。セクレタリーの小松優香さんによってDVDの会、グローバルジャパン研究会や部会案内の連絡が行き届くなど広報を支える事務局体制も整ってきた。

広報メディア委員会の目的は、団塊世代など比較的若い世代に対する働きかけであり、具体的には会員の増加である。そのために、広範な人々に働きかけることができる当会に相応しい広報・PRの基本姿勢や方策などを検討する。

幹事の藤田氏の会社の会議室をお借りして毎月開催し、六月三日の第一回から九月一日の第四回までに、泉代表はじめ今まで当会メディアの編集・管理を担ってきたメンバーや新規会員も加わり、各回六～八人、延十三名が参加している。内容は、基本的な理念、情報交換から具体策までを活発に意見交換している。とくに、懸案であるメール網やホームページの運営管理の試行錯誤によって、具体的な進展があり、活用に向けて皆さまのご協力をお願いできる段階に近づいてきた。



ホームページの「お知らせ」欄

①メールアドレスを登録してください。

メールリスト登録者には、事務局から月末に翌月の催し案内を一覧を送信することとし、八月末に九月の催し案内が送信された。そのほか、DVDの会、グローバルジャパン研究会、歴史部会などの開催案内や報告、頻度は少ないが登録会員による各種の情報提供、意見もある。未登録の方は是非アドレス登録をお願いします。

②ホームページ「お知らせ」欄を見てください

トップページ「お知らせ」に、各種案内を迅速に掲載できるようになった。催しの急な日程変更なども、項目をクリックすれば詳しい内容が分かる。新しい刊行図書案内も掲載しているので、時々チェックしてください。

(文責) 中山進

「実記を読む会」番外編 高田誠二先生を囲んで

五月二十七日、久米美術館（JR目黒駅前）で開催、十六名が参加。

高田先生のお誘いで、この記念すべき会合が実現した。席上配布の「久米邦武およびその編著『米欧回覧実記』の「科学技術史的研究・studyメモ」A四・十二ページ二百四十項目にわたる著書・論文の質・量に圧倒される。

「後進の研究者は、これらの文献を先ず乗り越えて…」との先生の発言に凄みを感じた。また久米の多面性に言及され、殊に「科学史研究の対象としての久米邦武」を追求、漢学を修めた久米が理学に開眼した先例を裏返して、

理学を学んだ私は今から漢籍群に挑戦しようではないかと（「館報」より）悲壮かつ不遜ともいえる志を立てた経緯を拝聴。



高田誠二先生

驚いたのは回覧された原資料（和綴本）の『回覧日記（第一版）』は、『実記』の原稿第一版で、まるで活字のような手書き原稿に、久米の朱筆があちこちに入っている、紙魚の喰い跡も点々と、これが『日記（第十版）』まで推敲を重ねた結果、『米欧回覧実記』として結実した軌跡を目のあたりにしたこと、久米美術館の現場ならでの「宝物！」に触れることが出来た。

残り時間僅かのなかで、五〇六質疑あり、高田先生の丁寧な応答を頂いた。以上、約二時間の緊張と啓発に充ちた貴重な体験をさせて頂いた。『評伝久米邦武』をめぐり、更に掘り下げた討議の機会を是非持ちたい。

「久米美術館」品川区上大崎二丁目二十五久米ビル八階（〇三三三四九一一五一〇）

JR山手線目黒駅西口下車徒歩一分。開館十時〜十七時、月曜休。

（文責）桑名正行
（写真）橋本吉信

グローバルジャパン研究会

◇第三回研究会

六月二十一日、国際文化会館。発表者は泉三郎氏、テーマは「貪欲収奪文明から最適循環文明へ―直観的提言」。

- 〔レジメの主な項目〕
- 一・現代、アメリカングローバルイノベーションの原理と危機的影響
- 二・現代文明、西洋近代化の源流を探る
- 三・文明とは何か、政治の目的とするもの
- 四・具体的提言、いくつものキャッチフレーズ

〔主な論点〕

現代を貪欲収奪文明とみて、最適循環文明へのパラダイムシフトを提案する。現代を物も情報も過剰、逆に精神やモラルは過少とみる。また、現代は浪費文明であり、資源エネルギーが過剰に収奪され、過剰な開発や廃棄物が地球環境を破壊し汚染している。

日本は大国でも小国でもなく「中和の国」、「最適循環の国」をめざすべきと提言。

◇第四回研究会

七月十四日、国際文化会館で行なわれた。発表者は安原和雄氏、テーマは「憲法九条を世界の宝に」。

〔レジメの主な項目〕

- 一・世界に期待の高まる憲法九条
- 二・九条世界宣言の歴史的意義
- 三・和平―日本思想にみるその系譜
- 四・「九条輸出立国」を目指す日本新生プラン

〔主な論点〕

日本の「和平の思想」を、聖徳太子の十七条憲法から説き起こし、江戸期の安藤昌益の平和論、明治期の植木枝盛、中江兆民、そして大正期の「小日本主義」、三浦鉄太郎、石橋湛山へと展開する。

二〇〇八年五月に幕張メッセで開催された「憲法九条世界会議」に言及し、その狙い「戦争の廃絶を指して、九条を人類の共有財産として支持する国際運動をつくりあげ、武力によらない平和を地球規模でよびかける」を紹介。日本から「憲法九条を世界の宝に」と提言する。

◇第五回研究会

八月三十日、国際文化会館で行われた。発表者は石坂芳男氏、テーマは、「グローバルトヨタウエイダイアレクチック・アプローチ」。

〔レジメの主な項目〕

- 一・トヨタウエイの源流
- 二・グローバルトヨタウエイ
- 三・トヨタの特徴、プロセス志向



グローバルジャパン研究会（8月30日）

四・ダアレクチック・アプローチ

〔主な論点〕グローバルに考え、ローカルに行動する。トヨタウエイのコアにある思想は「知恵と改善」及び「人間性尊重」とりわけ重要なものは、相互信頼とチームワーク。風土や歴史や信仰が異なる地域でも人間の本质に変わりはなく、とことん相手の言い分を聴いて、いかに誠実にそれに対応するか。それが結局は「七人の敵をも友達にしてみよう」説得術になる。

根本は「人間性尊重」であり、一見して矛盾する事柄をもねばり強い努力で高次元で調和させる。いわば「弁証法的（ダイアレクチック）な論法」であり、政治や言論の世界でも通じる日本的なアプローチではなからうか。

（文責）泉三郎

歴史部会・番外編 世界の江戸化『エドナイゼーション』論を紹介

七月二十九日、国際文化会館にて第三回となる読書会が開催された。今回は、五月からスタートした岩波新書シリーズではなく、番外編として会員の小野寺満憲氏による『エドナイゼーション』の講演をお願いした。明治維新は江戸の人的・文化的遺産があつてこそ成功した。その江戸の遺産を生かして、世界を江戸化(エドナイゼーション)するユニークな文明論の紹介である。

幕末、明治に日本を訪れた外国人は、こぞつて清潔で、勤勉で、モラルが高く、美しい心根をもった日本の国民性を賞賛する観察記を残している。それを培った江戸とはどんな時代だったのか。家康は天下を取ると、当時世界一のレベルにあつた鉄砲を捨てて平和への国家を選んだ。士農工商の身分制度があつたが、上に立つ武士は、武士の職分としての役を演じ、自己犠牲と奉公のエリート精神(ノブレスオブリジエ)があつて、利益追求だけが社会のルールではない世界を作り上げた。商人は世界に先駆けての、資誠実・勤勉・正直による、資

本主義的市場経済システムを展開し、大阪の米市場、問屋の株仲間、変動相場性の両替商、北前船や廻船の流通システムを確立。幕府による天下普請はケインズ政策であつた。参勤交代は消費需要を喚起して、各藩と江戸間の陸上流通を担った。鎖国とは見せ掛けで、実際はオランダや中国商人、琉球の朝貢・東南アジア貿易などで、貿易も情報も世界に開かれていた。その豊富な外国情報による危機意識が明治維新を生んだのである。一揆ばかりが強調される農民は思った以上に自立した農業を営んでおり、農書の普及による農業革命も進んでいた。各藩は、米以外の特産品の開発に熱心であつた。

江戸の教育システムは寺小屋であるが、世界に類がなく、庶民、女、子供に身分関係なく開かれていた。今につながる江戸のしぐさを生んだのも中江藤樹の陽明学にあたり、知行合一、善事即行、顔かたちと言葉づかいを大切に教える。町も親も子供を宝として守った江戸。明治維新の先覚者はすべて江戸の教育で育まれたのである。悪名の



小野寺満憲氏
(歴史部会)

高い、生類憐みの令も、あらゆる生物との共生の精神の涵養に資した。

江戸っ子はまた、一年中風流を楽しんだ。花見、生け花、虫聞き、月見、祭り、園芸や伝統文化の歌舞伎、文楽、柔道、落語、俳句、短歌、川柳、浮世絵、和服、和算学、茶道、書道、小説などのいまにつながる文化も江戸時代に開花した。江戸は、自給自足と典型的な省エネ・リサイクル社会でもあつた。

現在日本が世界に発信しているアニメ・マンガ・ロボットなども、江戸の浮世絵やからくり人形に源流がある。生活を芸術化する知恵が、日本にはある。

世界がいま求めているのは、経済大国や軍事大国でなく、美しい国、やさしい国、富国徳の文明や「もったいない」精神の世界ではないか。エドナイゼーションに共鳴する小野寺氏の熱い思いが周到に準備された豊富な資料により、送り出るような二時間半だった。

(文責) 小野博正

DVD「岩倉使節団の米欧回覧」を見る・聞く・語る会

◇第三回の報告と感想

六月十四日(土)十三時三十分から、十九名が参加してJICA地球ひろばで開催された。内容は、英国編第四章「最盛期の英大帝国を往く」と第五章「英国の光と影」。

初めて出席の三人の方から自己紹介およびなぜこの会に出席されたかお聞きした。そのうち一人は地球ひろばに貼つてあつたチラシをみて参加したとの若い女性。一人は、かつて日本人が持っていたよさが近代化やアメリカナイズされたことにより失ったと感じている。また、シニアの方はイギリスに滞在していたので懐かしさもあつて出席された。天皇が皇太子時代、エリザベス二世の戴冠式に出席された折、一週間ほどアームストロングの別荘に滞在されたことなど話された。

十九人中、会員は五、六人で、「会員でない方」にも広めたいとの、DVDの会の目的にかなって来たのではないかと。さらにこの調子で押し進めていければと望む。尚、初参加の日沖氏がパソコンの操作をして下さり、無事旅が来たのは幸いだつた。

(文責) 多田幸子

◇第四回の報告と感想

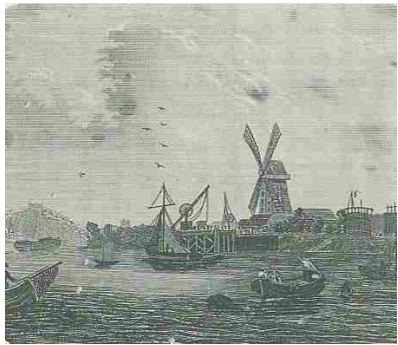
七月五日(土)、十三時三十分からJICA地球ひろばのセミナールームで行われた。参加者は、大学生が都合で欠席となり、これまでに比べ七名と少なかった。内容は、第六章の「麗都パリとフランスの底力」と第七章の「新興ドイツと大ロシアそして小国の智恵」。

DVDから窺える当時の華やかなパリの街並みとフランスの国家づくりの素晴らしさに注目が高まった。当時のフランスと現代の日本を比べ、「日本も緑や古くからの建築物を活かした美的な国でなくては」という感想や、「日本も国家経営をしつかりすべきだ」という意見もあり、少数だけに談話的な雰囲気なかで中身の濃い話ができた。

◇第五回の予告

九月十三日(土)、十三時三十分からJICAで行われる。いよいよ第八章「西洋文明の源流イタリアそしてアルプス国」および第九章「中東・アジアの植民地帯回覧、そして帰国」。これで岩倉使節団の主なルートを旅し、世界を一巡することになる。今後の方針も含め相談したく、多くの方の感想やご意見をお伺いしたいので、ぜひ参加を期待します。

(文責) 小松優香



テームズ川下流の風景 (『実記』)

実記を読む会報告

連絡 桑名 正行

Tel&Fax 03-3642-9570

mkuwana@nifty.com



第百十九回

六月十二日
開催、出席者
十二名。

第七十二巻
は「南日耳曼
ハ一二来因同
盟ト呼フ、北
日耳曼、及ヒ
奥国、日耳曼
ト鼎立シ、流
風政治、自ラ
同一ナラス」

の書き出しで始まり、続けて「日耳曼ノ国タル、常ニ佞國ニ管係ヲ有ス」として、特に南ゲルマン諸國の歴史がいかにフランスに影響されてきたかが詳細に語られる。

五月五日フランクフルト出發。汽車は麦畑に菜の花が混じる「繡霞ヲ分ケテ」すすむ。次第に森林が増えてくる。ここで各國の森林率(国土に占める森林面積比率)の比較で、南ゲルマンの高い森林率が示される。

ニュルンベルグはホップの「欧州中心」の取引所があり、ゲルマンビールがおいしいのは「当國ノ葎穂ハ最上品」の故である。西行して至るヴィルテンブルグ王国は自然豊かで、ドナウ川の水運を利用して経済発展している。またバーデン大公國は田園・森林豊かで、多くの大都市が発展している。

夕方ドナウ川を渡り夜ミュンヘン到着、投宿。東南にはアルプスに連なるチロルの山々が一望できる。宮殿(現在のレジデント)、芝居(現在の州立劇場)、新旧蔵画館(アルテ・ピナコテーク、ノイエ・ピナコテーク)、凱旋門、公苑(現在のイギリス公園)、育嬰院(育児院)、イザール川、博物館と女神像など市内遊覧。

七月十日開催、出席者十一名。
第七十三巻、以太利國ノ略説。一行は夜行列車にてミュンヘンをたち、当時の国境アラ駅で通関を済ませる。

岩倉翔子編、「岩倉使節團とイタリア」によれば、幕末以来、イタリアの日本への最大の関心は、当時地中海沿岸に蔓延していた蚕の微粒子病に汚染されていた蚕の日本産を輸入する事にあつた。

「従つて：国境で一行を出迎える役目は、意味深長にも彼(農務大臣)に委ねられ：不首尾に終わった：なぜなら：複雑な官僚的「折衝過程」が終わる頃には、日本の使節團は：自力でフィレンツェに向かつてしまつていて：特別仕立ての鉄道車両は、無人のホームに出番なしに放置され：」と、事ほど左様に、すべてが運んだようである。

古代ローマ以降、長年他國の侵略、干渉、統治に悩まされ、それに対抗するローマ教皇のキリスト教総本家という宗教を武器とした節操なきせめぎ合いに翻弄されつつ、小都市國家の集まりであつたイタリアが、仏革命、ナポレオンの侵略等、時代の流れとともに独立機運が高まり、使節團が訪れた時は、独立國家成立直後で、ローマが首都になつたばかりの時であつた。統一直後の混乱は想像に難くない。

アルプスを越え、陽光輝く南の地に降り立ち、「山秀テ水清ク、空氣清暢、土壤肥沃野芳モ妍妍トシテ、美ヲ争フ：」「到ル所皆碩美ナル果ヲ結フ：日トシテ其美ニ飽サルナシ」等、ここでは他國での工業の発達に対する感嘆詞に替わつて、豊かな気候風土への感嘆詞が印象に残つた。

英訳実記を読む会報告

連絡 岩崎洋三

Tel & Fax 03-3488-0532

y-iwasaki@isr.or.jp



第六十一回

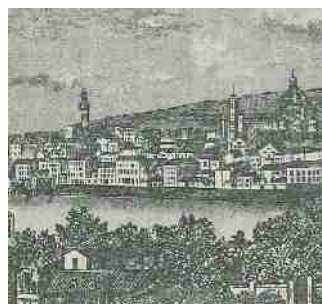
六月十九日、
参加者は七名。
第二巻、Ch. 40
London.

岡部さんがビスケット工場見学部分を、次いで森本さんが種子会社、ガス工場見学部分を報告。

久米がビスケットの製作工程を詳細に延々と記述する一方で、当時大きな問題になつていた労働争議に触れなかつたのは、英訳注記者が指摘する通り疑問だつた。

また、「管ヲモツテ大突ニ接合ス」等不適切な英訳が相変わらず散見された。一方「チインマルライ」など久米の表記にも意味不明のものがあつた。

七月十七日、参加者七名。
Ch. 40 London.
久保田さんが長い部分をこなしていただき、やつと第二巻を読了した。
この部分は数少ない農業に関する記述とロンドンの商都としての賑わいが紹介されているが、久米はアメリカ、英国と日本との比較において、日本の農業の将来をこれまでの経験的知恵に基づくものに科



アルノ川とフィレンツェの町 (『実記』)

学的知見の利用と機械の導入を加えることによつて大きく発展すると予見している。英國の「国力」の源が貿易と工業にあることは見て取つてきた。ここで農業が「国力」の源の一つであることを改めて認識している。

ロンドンを商都と見ているが世界中の原料、がここに集まる様子を見て世界の商都となつていくと驚きその活力を支えているのが銀行であると指摘している。そして銀行の数、取扱高、中央銀行の銀行券の発行高をたんねんに数字的に挙げ銀行の役割の大きさに気づき心は既にフランスに向かつているにも関わらず書き残している。

そして国内政治と市民の生活には見るべき物がないと言いつつ切つていくところは、フランス革命後の政治体制と市民の権利意識(Civilization)と久米はいつている(に興味が移つていたようである)。

(文責) 岩崎洋三
久保田謙治



大平忠氏 (歴史部会)

から始める。牧原には、『明治七年の大論争』と『客分と国民の間』の著作がある。前者は、明治七年に出された四百九十余件の建白書を読み解いて、政府派と民権派、守旧派と民衆派、徴兵制か士族兵制かの二項対立の存在、そして当時の民衆を開化すればするほど、反政府となつて跳ね返ってくる明治初期の政治的ジレンマを語る。後者では、国民国家を目指す、政府、民権主義者に対し、一般民衆は「たとえ日本が赤髭の属国に

歴史部会報告

連絡 小野 博正



mi040031-9697@tba.t-com.ne.jp

■第二回読書会

六月三十日、出席者十五名。

テーマは、『民権と憲法』(牧原憲夫)を読んだ。レポーターの大平忠氏は、著者牧原憲夫の紹介

なるうが、誰が為政者になるうが、己の飯さえ食べればよい」といった、客分意識が強く、民権派も政府も国民意識の植え付けが、当時の最優先課題であったことを読み解いている。
地租改正による、地価の三分の二に相当し、農民にとっては酷税であった。地租改正反対、血税徴兵反対、学制反対の不平不満が爆発して、一揆を生んだ。大平氏の先祖の地起こった讚州竹槍騒動では、老女が子をさらおうとしたという「子う取婆さん」事件が発端で、「一犬虚に吠えれば、万犬実には吠える」のごとく、燎原の火のように、十二万の庶民が参加の焼き討ち一揆として、周囲の地方に拡散したことに当時の民意の在りどころを見る。
また、著者の敬愛する色川大吉の『自由民権』に触れて、明治の民権運動が、公権を重視、私権が疎かになり、国権と民権の掘り下げ不足で失敗に終わったこと。しかし、その民権運動のエネルギイは時代を経て、戦後の水俣病市民運動などへ繋がったとみる。
憲法は瀧井一博著『文明史の中の明治憲法』によって解説された。岩倉使節団の憲法体験―万国公法から憲法への

現未来部会の現況

連絡 塚本 弘



hiroshi.tsukamoto@eu-jyapan.gr.jp

■日本の政治の今後のあり方を考える
七月二十三日開催、出席者は十三名。
現未来部会の今年度の基本テーマは、昨年度から引き続き「日本の政治の今後のあり方を

課程を、久米邦武の憲法観察、木戸孝允、大久保利通の憲法観とそれらを戴しての伊藤博文の滞欧憲法調査と憲法制定への道のり。伊藤は憲法、議会に加えて行政の重要性への覚醒、そして西洋の統治原理であるキリスト教に代わって、天皇を中心に置く立憲君主制の採用に至る経緯を論述。なべて、この著者牧原氏の記述は、公平な歴史観を保っているとのレポーター評であった。そして、山県有朋の、中央・地方の官界や軍部などに自らの閥族を設けるなどの動きが、その後の日本を間違った方向へ導いたように思える」と述べて、若し、大久保、伊藤がもう少し長生きすれば、日本はどのような方向へ変わっていったらうかとの感慨で結ばれた。
(文責) 小野博正
*第三回読書会番外編の報告は、五頁に掲載。

考える」ということで、西井幹事が、「望ましい国の姿とは、国民ひとりひとりが安心して暮らし、自分の生き方に誇りを持ち、出来れば他国の尊敬を受ける」とデッサンして、そのために喫緊の重要課題として七項目を列挙、それを順次議論・整理することとした。第一回は「憲法改正問題」(二〇〇七年十一月二十八日)を、第二回は「地球環境保全問題」を議論した。
続いて今回は「安全保障体制」を取り上げた。スピーカーは戦後自衛隊発足後の最高幹部の一人としてご苦労された永島脩一郎氏が、自らの体験を踏まえて、まず日本に対する脅威とは何かについて纏められた。脅威の主体は、軍事的「能力」と「意図」であり、日本の外交の基本三原則(国連中心主義、自由主義諸国との協調、アジアの一員としての立場の堅持)を踏まえて、安全保障政策を考える必要があることを解説され、それを受けて活発な議論をした。日米同盟が何かと軋みを感じるところであるが、憲法改正問題や集団的自衛権を巡る問題、日本の軍事力の実体など、微妙な内容のやり取りも多くあって、興味の尽きない部会になった。
(文責) 小田仁彦

関西支部報告

連絡 難波 康熙



namba@jttk.zaq.ne.jp

■第四十四回

七月十二日、出席は十二名。使節団一行は、二回目のボストン訪問を行う。(実記第一巻三百五十五頁から) 今回の訪問で、アメリカの工業地帯の見聞を網羅したことになる。

南北戦争の結果、ボストンなどアメリカ北部(東部)における紡績の生産が一層盛んとなる。紡績産業に非常な関心を持っていったよう、工場見学に多くの時間を割いている。大阪は織維の町であったため中村、多屋両氏の織維産業に詳しい会員によって、種々のコメントが飛び交った。使節団の紡績の目の付けどころ、関心の対象とするところは正しかったと思う。
また、オーロラが欧州では北緯七十五度以上で見られるが、アメリカでは四十度でも見える。これは磁極軸がずれているためであるといった地球物理に関することまで言及している。(四百十三頁) 専門家である平山さんによっても正確であることが確認された。久米の博覧強記ぶりを示すものである。

(文責) 難波康熙

特定非営利活動法人
「米欧亜回覧の会」ご案内

- 趣旨** この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この大いなる旅と「実記」はまさに「温故知新」の宝庫と言えましょう。
この素材を端緒にして歴史を学び現代の諸問題についても語りあい日本をよくしていこうという会です。
- 会員** 趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。
- 例会** 年に4回くらい全体例会をもちます。
- 部会** テーマ別に読む会、歴史、現未来部会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。
- 機関紙** 年に4回程度機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。
- 役員** 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。
- 会費** 年会費5,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、学生、仮入会希望者には準会員(年会費3,000円)の特典もあります。
- 事務局** 「米欧亜回覧の会」
〒112-0006 東京都文京区小日向 2-26-3
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:080-6612-1101 FAX:043-238-6690
- 入会申込**
入会申込書は事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。
なお年会費などのお支払は郵便振込が便利です。
00180-2-580729 特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ等
また、書籍・DVD案内もあります

<http://www.iwakura-mission.jp>

*お知らせ欄も時々チェックしてください



<催し案内>

2008年9月～10月の予定です

☆10月全体例会

日時: 10月18日(土)
一部 会務報告 13:30～14:30
二部 講演 14:45～17:00

テーマ: 地球温暖化への挑戦
—政府、企業、市民は何をすべきか
講師: 西岡秀三氏 (国立環境研究所 参与)
場所: 日本プレスセンタービル
会費: 3,000円 (学生1,000円)

☆実記を読む会

日時: 9月11日(木) 18:30～21:00
10月9日(木) 18:30～21:00
場所: 国際文化会館 (会費1,000円)

☆英訳実記を読む会

日時: 9月18日(木) 18:30～21:00
10月16日(木) 18:30～21:00
場所: 国際文化会館
会費: 1,000円

☆歴史部会／近現代シリーズを読む会・第4回

日時: 9月22日(月) 18:00～21:00
テーマ: 『日清・日露戦争』(報告者: 大森東亜氏)
場所: 国際文化会館
会費: 1,000円

☆グローバル・ジャパン研究会・第6回

日時: 9月20日(土) 13:30～17:00
講師: 永池榮吉氏
テーマ: 世界に発信する日本文明の課題
場所: 日本プレスセンター9階会議室
会費: 3,000円

☆DVDを見て、聞いて、語る会・第5回(最終回)

日時: 9月13日(土) 13:30～16:30
場所: JICA地球ひろば(03-3400-7717)
会費: 1,000円 (学生無料)

☆関西支部例会

日時: 10月18日(土)
場所: 大阪弥生会館

編集後記

◇DVDの会やグローバルジャパン研究会などを契機に会員になる方々があり、当会活性化の兆しが見えてきました。しかし、新規会員が各部会の日程を知るには年四回発行のニュースが頼りです。そこで、広報メディア委員会が毎月会合をもち、事務局と連携してメールやホームページで各種の案内を掲載することを少しずつ具体化しています。

インターネットばかりに目が向いているようにみえますが、当会の性格からいって、委員会のメンバーも「活字人間」が多数派です。ネット文化による席卷ではなく、「苦手の克服」を基本姿勢にして挑戦しています。

◇三頁、水澤周氏の写真は二〇〇一年の国際シンポジウム会場と思われれます。ニュースでは、水澤氏の現代語訳がパリに入った段階でお願いした書き下ろし原稿「『米欧回覧実記』を現代語にしてみても」久米邦武との二人旅の中に掲載(三十号・二〇〇三年三月発行)しています。この原稿は、ホームページの会報アーカイブでも読むことができ、普及版を前にして読むと感慨が新たなようになります。謹んでご冥福をお祈りします。(N)